

はじめに

徳次郎石研究会が発足し、3年目の、2021年（令和3）年度の研究活動の成果集の発刊にいたりました。偏に会員研究者はもとより、市民一般の皆様のご努力とご支援の賜として、巻頭の挨拶を述べさせていただきます。

今年度を振り返りますと、相変わらぬコロナ禍により、研究活動の環境は必ずしも良好とはいえないものがありました。しかしながら、総じて、予想以上の成果を上げたと総括しております。とりわけ、12月12日の本会の中心的事業の『中間報告会』には、ロコミだけで一般ギャラリーの方を含めて約30名の方の参加があり、まったくうれしい限りでした。本書にいたしましても、予想を上回る論文が寄せられており、会員の諸氏の熱気の程がうかがえます。

これは、少々手前味噌ではありますが、社会の「大谷石の日本遺産」の関心の深まりもさもさることながら、本会の理念である、日本遺産の根底にある幅広い地域の生活文化に根差した石文化を見捨てることのできない、科学と文化の融合した研究の必要性が、広く受け入れられていると考える所です。引き続き、今後、意を強くして、努力してまいりたいと考えます。

さて、本年度の活動の主な出来事について述べさせていただきます。

1. 研究対象が、野州石造文化圏の県内各地の採石場に及びました。

「野州石造文化圏」採石地の相互の科学と文化の相関性については、従来から課題としておりました。しかしながら、多くの採石地においても、記録性はほぼ皆無に近いのが実情にもあります。日々、伝承者も亡くなっていく現状から、当会での発掘が強く期待されており、早急に、機会のあったところから、調査に着手することとして臨んでおります。今回は、那須烏山市などの各自治体とも連携とご指導を仰ぎながら、次の箇所の調査をいたしました。

那須烏山市 中山石／塩谷町 船生石／日光市 板橋石

*これら研究範囲が、単に徳次郎石の研究のみならず、そこから派生した広い石の世界を極めるため、本会の会名は、「徳次郎（とくじら）石（いし）／研究会」を、「徳次郎（とくじら）／石研究会」との認識に改めることといたしました。

2. 宇都宮市域につきましては、従来から徳次郎山の尾根の反対側の地帯の、国本の採石場については、「石名」のみで、その実態が分からないまま終始しておりました。今回初めて、地元の文化財調査員さんのご協力もあり、ほぼその全容に迫ることができました。これにより行政区域を超えた、地層つながり等の考察につながると思われます。

3. 模造紙での活動報告の展示につきましては、ほぼ一年を通して、宇都宮市地区市民センターの各地で実施いたしました。

今回も、引き続き「令和3年度 宇都宮市市民活動助成金」の交付決定を受けて、市より助成金のご支援をいただきました。つきましては、その成果の発表を経て、市役所ロビーの、模造紙での展示会を、他の助成金交付の市民団体と共に実施されました。この時の展示した資料を活用し、かつ各地区市民センター地内の石文化の内容を追加しつつ、次の箇所で巡回で展示会を実施しました。

市役所（本庁）ロビー⇒富屋地区市民センター⇒国本地区市民センター⇒豊郷地区市民センター

それぞれの展示では、当地で産出された石の種類や石の産業・文化に驚きをもって接され、故郷の歴史と科学の理解に一役買いました。特に、来訪者の方々には、懐かしく、かつての採石場跡の風景を見入っている姿が印象的でした。

4. 徳次郎石研究会の次なる展開、地域レガシーのために

活動の3年経過、お陰様でというのが実感ですが、やっとデータの集積と記録により、多少の一堂に会した発表が見込まれるようになりました。これらを、本書などの論文形式から、一般向けにした、「写真集」の発刊や「フォーラム」の実施を、翌々年の5周年（令和5）に、イベント形式で実施を計画したいと考えております。その予備年として、次の令和4年度を必要な準備期間といたします。

改めまして、本会の成立・運営・執筆にご尽力をいただきました方々に、敬意を申し上げ、又、各地のお住いの皆様にご協力をいただきましたことを、心より御礼申し上げます。

2022（令和4）年3月

徳次郎石研究会 代表幹事 中川 博夫
徳次郎石研究会 編集担当 中村 洋一・池田 貞夫